

## 竹原を訪ねて～61年前にあったこと

幹事 鈴木盛久

この度の例会は、広島市から高速バス「かぐや姫号」で片道80分の竹原を訪れるというものでした。主な目的はガイドさんの説明をききながら、江戸時代から昭和終戦前の建物が残る「町並み保存地区」（1982年重要伝統的建造物群保存地区に指定）を散策することでしたが、期待にたがわず大変興味深いものでした。

「道の駅たけはら」を出発し、本町通りという中心の通り沿いに見ていきましたが、そこは主として江戸後期に製塩業、酒造業、紺屋（染物業）等で栄えた屋敷や由緒ある古刹が残る町並みが続き、往時にタイムスリップをしたようでした。頼山陽所縁では、頼家発祥の家として県史跡の指定を受けた祖父頼惟清（ただすが）旧宅及び国指定重要文化財の叔父春風の旧宅（春風館）の落ち着いた風情が印象に残ります。父の春水は幼少期に竹原で暮らしており、山陽も何度か訪れ、漢詩を残しているとのことでした。

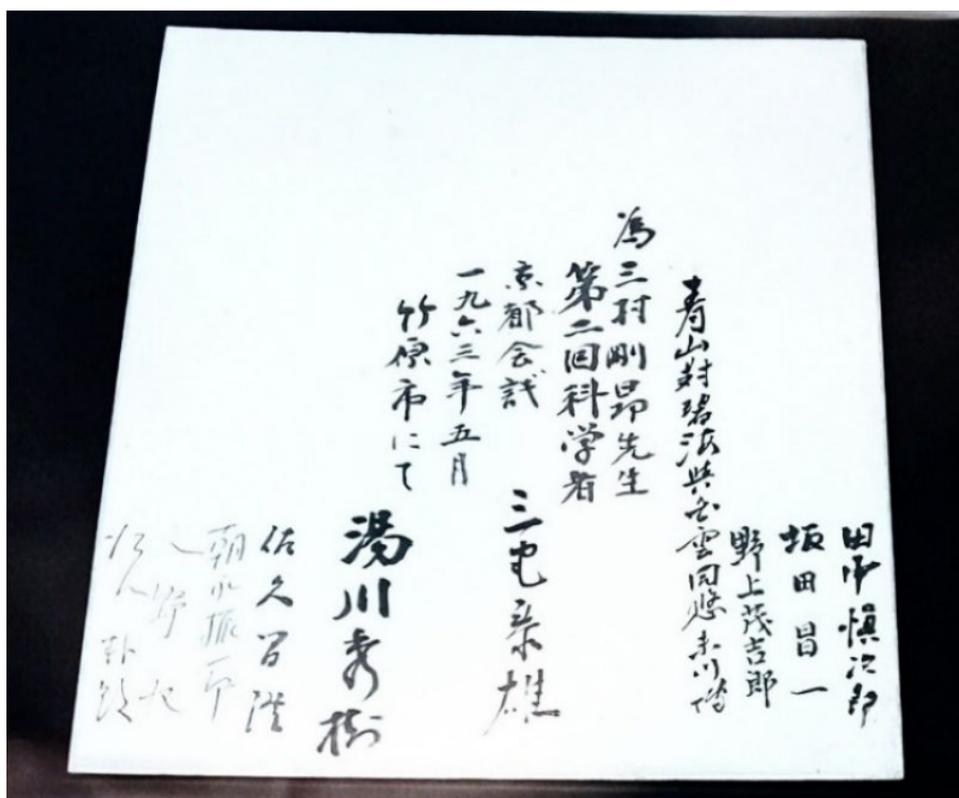
重厚な構えの町家が並ぶ町並みを歩きながら、頼家はじめ多くの学者や文化人が育った背景に、竹原には豊かな経済力があつたことを実感しました。

時代は下って昭和初期に図書館として建てられた洋風建物が、頼惟清旧宅から70mほど南に下ったところに竹原市歴史民俗資料館として保存されていました。頼家にまつわる古文書、竹原に繁栄をもたらした産業である製塩業や酒造業の歴史資料などが主な展示でした。

玄関に入って左側に「竹原の偉人」というコーナーがあり、「文教の地竹原」は国内外に影響を与えた偉人を輩出しているとして、ウイスキーの父といわれる竹鶴政孝氏（1894-1979）、58～60代総理大臣を務めた池田勇人氏（1899-1965）と並んで日本物理学の先駆者として三村剛昂（よしたか）氏（1898-1965）が紹介してありました。財界、政界、学界でそれぞれ活躍された地元出身のお三方がほぼ同時代を生きられたと知って、まさに奇遇、と驚きました。

三村氏のお名前の下にある一枚の少し黄色味を帯びた色紙が目にとまりました。それは為三村剛昂先生とした寄せ書きでした。三村剛昂氏は、故郷の竹原市にかつて広島大学理論物理研究所を創設し、初代所長を務めた理論物理学者です。ご自身は被爆者で、核の脅威と核廃絶を訴え続けておられた方です。

色紙には1963年5月第2回科学者京都会議竹原市にてと記され、湯川秀樹、朝永振一郎、末川博、久野収など著名な学者の名が見られました。それを見て、私の頭の中は61年前に飛んでいきました。前年10月にキューバ危機というアメリカと旧ソビエト間で核戦争が一触即発で起きかねないという緊張が広がったことがありました。それを受けて、1963年5月竹原市で上記の会議が開催されました。参加者は色紙に署名のある著名な学者達10名で、三日間のまとめに「一九六三年五月九日 広島県竹原にて」として出された声明では「日本が核



### 三村剛昂氏に寄せられた署名

右から田中慎次郎、坂田昌一、野上茂吉郎、末川博、三宅泰雄、湯川秀樹、佐久間澄、朝永振一郎、久野収、江口朴郎の各氏 (2024年11月15日撮影)

非武装の原則を貫き、一切の核兵器の持ち込みを拒否することは、単に日本が戦争にまき込まれる危険を減殺するだけでなく、アジアにおける核戦略体制の恒久化を阻止するのに有効であり、世界平和に対する日本の大きな貢献となる」と反核平和への思いが述べてあります。その会議を地元竹原市に呼び、議長を務めたのが三村氏でした。

5月9日科学者会議を終えた湯川氏らは広島市に移動し、夕方から広島市公会堂で市民向けの講演会が開催されました。三村氏と親交のあった亡父が「このような大事な機会を逃すな」と申すので一緒に会場に参りました。1963年はちょうど私が大学に入学した年で、少し背伸びをして難しい講演を、静まり返った聴衆の一人として聞いた記憶はあるのですが、詳しい中身はよく思い出せません。そこで当時の新聞を見ますと「平和を創造するための学術講演会」というタイトルで1800人の聴衆を前に、浜井市長の挨拶の後、湯川秀樹、朝永振一郎、末川博各氏が平和への道筋について講演し、聴衆に深い感銘を与え、最後に三村剛昂広大名誉教授が挨拶をした、とあります。ともかく湯川秀樹氏はじめ著名な方々の生の声を聴くことができたことにまず感動し、平和を創造する科学者の立場から語られた平和への思いに触れたというかすかな記憶があります。

今年、世界で核の脅威がますます増幅するなか、日本被団協のノーベル平和賞受賞が決ま

りましたが、この度の竹原訪問によって、第二回科学者会議の重要性をあらためて認識し、地元三村氏をはじめとした反核平和の志に燃えた先人達の活動に思いを馳せることができたのは大きな収穫でした。

そして、ほとんど高低差のない町並みの散策は、足腰がややおぼつかなくなってきた身にはまことに有難いことでした。